

ニューヨーク日本人学校における異学年交流と現地理解を深める実践

前ニューヨーク日本人学校 教諭

埼玉県さいたま市立針ヶ谷小学校 教諭 船山 隆

キーワード 異学年交流、現地理解、ニューヨーク、在外教育施設

赴任校の概要（2024年8月現在）

学校名・日本語：ニューヨーク日本人学校

学校名・現地表記 The Japanese School of NewYork (Greenwich Japanese School)

URL：<https://www.gwjs.org/>

1 はじめに

在外教育施設で勤務する機会をいただき、全国から集まった先生方と共に、アメリカで生活する日本の子ども達の育成に携わるという貴重な経験をする事ができた。その中でも、コロナ禍の影響によるオンラインと対面でのハイブリッド授業や、校舎移転に関わる様々な業務等、これまでに経験した事のない様々なことを体験した有意義な時間であった。ここにその概略を紹介する。

2 赴任後に直面した壁と、校舎移転による様々な障壁

赴任時は以前としてコロナ禍ではあったものの、2021年4月に予定通り渡米することができた。当時、在籍が3年目となる先輩教員は1人しかおらず、前年度に赴任した2年目の先輩と私たち同期によって2021年度がスタートした。2年目の先輩教員は1学期間のほとんどを日本からのオンライン授業で行っていた。そのため4月からの新学期の様々な行事運営について経験した者が居なかったこと、コロナウイルスの影響により学校を閉じていたことが重なり、校外学習ではどこに行っていたのか、どんなことをしていたのか等、教育課程をどのように進めてきたのかを過去の資料などから知るところから始めるという、正に探り探りのスタートであった。派遣教員、現地採用のスタッフなどが協力し、少しずつコロナ前の学校生活に近づけるよう懸命に努力したことを強く記憶している。そして派遣2年目には校舎移転を迎えた。様々な課題があったが、私が担当していた体育科でも自前の校庭がなくなったことにより、体育の授業や運動会をどこで行うのか等大きな問題に直面した。現地の様々な施設や学校と交渉し、何とか活動場所を無事に確保できた。そして、一大行事である運動会も無事に実施できたことが本当に喜ばしかったと記憶している。このように在外教育施設では、日本では経験しないような様々な課題に直面することが多々あった。しかし、学校運営に関わる全ての方、教職員の協力、そこで真剣に学ぶ子どもたち、全ての力が合わり、従来通り、もしくはそれ以上の教育活動になっていったのではないかと感じている。

3 体育科の運動会に向けた実践―異年齢集団でのかかわりの充実―

同校は、運動会において表現運動（ソーラン節）、高学年リレー、団体種目（ラケットランナー）、を3学年合同で行っていた。その中で、学年間の技能差が大きく、下学年になるにつれ動きの定着度が低いことが課題となっ

た。そこで、異年齢集団の特徴を生かし、上級学年に役割をもたせ、指導や助言、サポートの場を意図的に設定した。どの種目においても、まず、教員が全体指導で動きの指導を進め、その後高学年児童が教える時間を確保した。結果として、短時間に一人ひとりへフィードバックが可能となり、それにより指導が通り、下学年の技能に格段の向上が見られた。

このような取り組みにより、高学年は、自己有用感をもつことにつながり、下学年は「こんな6年生になりたい」「6年生すごい」といった「憧れ」の感情を持つことになり、次は自分たちの番だと、次年度への意欲を高める好循環のスパイラルが生まれるのではないかと感じた。

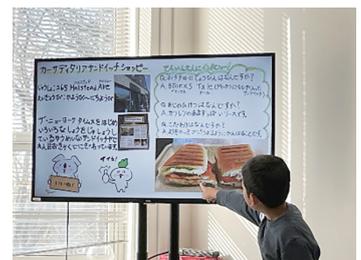
4 第4学年 総合的な学習の時間 単元名「町のすてきを紹介しよう」の活動

ニューヨーク日本人学校の特性を生かした取り組みを模索し、アメリカという土地、とりわけ、コネチカット州にあり、ニューヨーク州に隣接した立地にあるという地域的な条件を生かしたいと思い本題材を設定した。子どもたちの実態として、住んでいる地域の実態をよく知らないという児童が多く見られた。そこで、自分たちの住む地域、学校のある地域について、興味・関心をもち、そこから課題を見出し、主体的に課題解決に取り組むことで、地域や学校に愛着を持ち、結果として、国際感覚を持つ児童の育成につなげたいと考えた。

(1) 具体的な取り組み

調べたことを1年生に伝えるということをゴールに設定した。

授業の導入で、現地採用の教員にインタビューをしてみようということで、街のお気に入りの場所や魅力について話を聞いた。ここでは、英語科の教員にインタビューするというので、英語でインタビューを考える際に、英語が得意な子に手伝ってもらったり、翻訳ソフトを駆使してインタビューを行った。これは英語科との教科横断的な学習にも繋がった。また、児童は、夏休み中や休日に保護者の付き添いのもと写真を撮りに行ったり、店員さんにインタビューをしたりと、学校外においても現地の人やものとの多様な関わりが見られた。また、国語科「パンフレットを読もう」の学習での学びを生かしながら発表当日に使用したパンフレットを作成した。「相手に伝わりやすくするためにはどうすれば良いか」という相手意識について、児童の間でしっかりと共有したことで、「発表にクイズが入っていてよかった」「漢字に読み



仮名があって分かりやすかった」「その店のおすすめがわかって良かった」など、発表の内容やパンフレットのまとめ方、情報の収集の仕方等について、具体的なアドバイスがたくさん出た。最後にMicrosoft Teamsを活用し振り返り用紙を共同編集して活動から感じたことを共有した。振り返りでは、友達の発表から学んだことや、発表に至るまでの作業時間の配分に関すること、発表の技能に関わること等多岐にわたる視点の振り返りを共有することができた。

この実践を通して、クラスの友人、地域の方、下級生といった様々な人との関わりが生まれ、国語科とも関連して学習を進めることができた。

(2) 成果と課題

児童は、相手意識をもって発表内容を考え、意欲的に学習に取り組んでいた。調べ学習の段階では、実

際にお店や施設に出向き、インタビューするなど、地域との関わりも生まれ、地域への愛着を感じたり、発信したりする喜びを感じている様子が伺えた。学級でのプレ発表で友達からももらったアドバイスをもとに修正し、本番はよりよい発表へ進歩させていた児童が多く見られ、学級内で互いに高め合う関わり合いも見られた。課題としては、手書きしたパンフレットを説明するために、最終的にはスキャンしてスライドにまとめたため作業が二度手間になってしまった。事前の取材が家庭の協力を頼ることになり、実際に行くことができた子と、そうでない子の発表の質に差がでてしまった。しかし、それを見て今回はパソコンで調べた情報のみになってしまった児童が次の改善に生かしたいという意欲につながってほしいと願っている。